

胃瘻造設したデュシェンヌ型筋ジストロフィー患者の 食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画の視聴に対する思い

大舘美貴^{#1} 野口美穂^{#1} 田中絵美子^{#1} 井上紗貴^{#1} 原田美咲^{#1} 伊藤奈美^{#1}

#1 独立行政法人 国立病院機構 徳島病院 看護部 776-8585 徳島県吉野川市鴨島町敷地 1354 番地

受付 2022.11.18 受理 2022.11.25 出版受託 2023.3.10

要旨

経口摂取が困難な胃瘻造設した DMD 患者が食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画の視聴に対する思いを明らかにするためにインタビュー調査を行った。対象は A 病棟に入院中の、食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画を視聴している胃瘻造設した DMD 患者 3 名。結果、胃瘻造設決定時に感じていた思いについては【納得したうえで胃瘻造設に同意した】【不安があったが胃瘻造設に同意した】などのテーマが抽出された。食に対する思いについては【胃瘻造設後も食べたいという欲求は続く】などのテーマが抽出された。食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画を視聴する思いについては【食へのこだわりから視聴に至る】【聴覚と視覚から得る満足感】【食事摂取映像視聴により食欲が緩和される】などのテーマが抽出された。経口摂取が困難となってからも食に対する欲求があり、3 名とも食へのこだわりから食事摂取映像の視聴に至っていた。食欲を満たそうとする手段として、食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画が活用されていることがわかった。

キーワード：デュシェンヌ型筋ジストロフィー、胃瘻、食事摂取映像、ASMR 動画、思い

はじめに

デュシェンヌ型筋ジストロフィー（以下、DMD とする）患者は病状の進行により嚥下障害が出現し、胃瘻造設を選択することがある。A 病棟における DMD 患者で胃瘻造設している割合は 83%で、そのうち 44%の患者が食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画を視聴している（令和 3 年 9 月時点）。経口摂取が困難な状態であるが、食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画を視聴することにどのような思いがあるのかを知りたいと考えた。

先行研究において明らかにしたものは無い。患者ごとに背景や思いが異なると考え、語りに焦点を当て分析したいと考えた。胃瘻造設した DMD 患者が、食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画を視聴することへの思いを明らかにすることで、胃瘻造設を行った患者への理解が深まり、今後、胃瘻造設を行う患者の精神的サポートにつながると考え、本研究に取り組んだ。

対象と方法

対象者は、研究に同意が得られた A 病棟に入院中の、食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画を視聴している胃瘻造設した DMD 患者 3 名。

（1）データ収集：データ収集は、半構造化インタビュー法を用いた。適宜質問を挿入しつつ、ナラティブ・インタビューを行った。研究対象者のプライバシーが守られるようカーテン隔離を行った。インタビュー内容は、研究対象者に同意を得て、IC レコーダーに録音した。

（2）分析方法：得られた音声データから逐語録を作成し、個々の事例の全体的なストーリーを理解した。語られた内容から一定の意味のまとまりを有する諸テーマを抽出しテーマ名を付けた。さらに事例ごとに抽出された諸テーマを事例間で比較し、共通するテーマを整理しテーマ名を統一した。胃瘻造設決定時に感じていた思い、食に対する思い、食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画を視聴する思いについて分析した。

(3)用語の定義 ASMR:Autonomous Sensory Meridian Response (人が聴覚や視覚への刺激によって感じる心地よい、脳がゾワゾワするといった反応・感覚)。思い：胃瘻造設した DMD 患者が食事摂取映像を視聴する情緒的・感情的な思考。

倫理的配慮

院内の倫理審査委員会の承認を得た上で、研究協力にあたっては、文書と口頭で参加は自由意思であること、研究参加中止により不利益が生じないこと、いつでも撤回出来ることを説明した。また対象者には研究で得られたデータについて個人が特定されないように匿名性で行うこと、研究発表以外には使用しないことを説明し、同意を得た。インタビュー途中で体調の不調が生じた場合は、インタビューを中止し、すぐに対応できる体制をとった。研究終了後、回収したデータは、5年間保存し、音声データの消去、USB データの消去、紙媒体のシュレッダー廃棄を行い、処分することを説明した。

結果

1. 研究対象者の概要 (表 1)

表 1. 対象者の概要

	A氏	B氏	C氏
年齢・性別	30歳代・男性	40歳代・男性	40歳代・男性
入院年数	7年3ヶ月	7年4ヶ月	12年11ヶ月
胃瘻造設期間	12年5ヶ月	2年1ヶ月	12年3ヶ月
ADL	全介助・終日ベッド上	全介助・終日ベッド上	全介助・終日ベッド上
食事内容	胃瘻より 半固形流動食 2回/日 ブレンダー食 2回/日	胃瘻より 濃厚流動食 1回/日 半固形流動食 2回/日	胃瘻より 濃厚流動食 3回/日 経口より ジュース・お茶 5回/日

2. 分析結果

結果の記述にあたってはテーマを【 】サブテーマを<>で表に示した (表 2)。

(1)胃瘻造設決定時に感じていた思いに焦点を当て、分析を行った結果、3のテーマ、5のサブテーマが抽出された。【不安があったが胃瘻造設に同意した】はB氏とC氏に共通していた。

(2)食に対する思いに焦点を当て、分析を行った結果、6のテーマ、8のサブテーマが抽出された。【胃瘻造設後も食べたいという欲求は続く】は全ての対象者に共通していた。

(3)食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動

画を視聴する思いに焦点を当て、分析を行った結果、5のテーマ、11のサブテーマが抽出された。【食へのこだわりから視聴に至る】は全ての対象者に共通しており、【食事摂取映像視聴により食欲が緩和される】はB氏とC氏に共通していた。

考察

胃瘻造設決定時に感じていた思いについて、分析結果から胃瘻造設決定後から経口摂取が困難となることを受け入れるまでの気持ちには段階があり、気持ちに折り合いをつけながら様々な心理状態を経て、現在の心理状態になっていることがわかった。対象者の心理状態にはフィンクの危機モデルが当てはまると考える。フィンクは危機の過程を「衝撃の段階」、「防衛的退行の段階」、「承認の段階」、「適応の段階」の4つの段階で表した。【不安があったが胃瘻造設に同意した】というテーマから経口摂取が可能であった対象者が胃瘻造設をすることで経口摂取が困難になる体験は、不安を伴い、今後自分がどうなっていくのかわからない自己保存の脅威を感じる衝撃の段階であると考え。病状の進行により胃瘻造設や気管切開術を行い、経口摂取が困難となった後も全ての対象者には食事を経口で摂取したいという思いや食に対する欲求があった。食べたいという

思いがあるなかで食事について考えないようにしていたという抑圧、食欲を物欲に代える代償行動は防衛的退行の段階であると考え。マズローの欲求階層論によると、食欲は人間にとって最も強いニードであり、生命を維持していくための生理的ニードである。対象者にとって経口で食事を摂取するという行為は、生命を維持し、人間らしく生きていくための喜びと楽しみを感じられる重要な意義を持っていたと考えられる。経口摂取が困難となった後、食に対する思いがあるなかで経口から食事を摂取できないというもどかしさがあった。現実には直面する承認の段階を経て、対象者は食欲を満たすために必要

な方法を模索した。経口摂取で食欲を満たすことが不可能な場合でも、食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画の視聴という別の方法を用いることで食欲を満たしたり、緩和させたりすることができることとわかり、胃瘻からの濃厚流動食の注入で満腹感が得られたために適応の段階に至ったと考える。今回 ASMR 動画を視聴していた対象者は1名であったが、経口摂取が困難となった対象者が咀嚼音に

よる ASMR 動画を視聴することで自分も食事を食べた感覚になり、食欲が満たされていることがわかった。食べたいという欲求を紛らわせ、食欲を満たす手助けの一つに咀嚼音による ASMR 動画を活用していると考えられる。【聴覚と視覚から得る満足感】というテーマから、視覚情報だけでなく、聴覚からの情報も重要であると考えられる。櫻井は、「ASMR のリラックス効果はモーツァルトのリラッ

表 2. 対象者の語りから抽出されたテーマとサブテーマ

	テーマ	サブテーマ
胃瘻造設決定時に感じていた思い	【納得したうえで胃瘻造設に同意した】	<胃瘻からの注入で栄養摂取をしながら、経口摂取が可能であるならと胃瘻造設に同意した> <胃瘻造設を前向きに捉えていた>
	【胃瘻造設後約7年間経口摂取が可能であったことより満足感を得ることができた】	<胃瘻造設後も約7年間経口摂取が可能であり、胃瘻からの注入と経口摂取を併用することで食欲を満たしていた>
	【不安があったが胃瘻造設に同意した】	<胃瘻造設が決定したときは衝撃を受け、手術に対する不安を感じていた> <1年間点滴で栄養補助をしていたため胃瘻造設し胃から注入することに不安を感じていた>
食に対する思い	【胃瘻造設後も食べたいという欲求は続く】	<飲食したいという気持ちがある> <食べたいという思いが大きい> <嚥下障害だけでも治ればよいと思うほど食べたいという思い>
	【食欲を抑圧しながら現実と向き合う】	<経口摂取が困難となり食事について考えないようにしていた>
	【注入で空腹を満たされたことで、経口摂取が困難となったことを受け入れられた】	<胃瘻からの注入で満腹感を感じ、食べた気分になることで経口摂取が困難になったことを受け入れられた>
	【食欲を物欲に代えるという代償行動で満足感を得る】	<食べられない分、映像に出ているキャンプ道具を購入することで楽しみを見出している>
	【飲食に対する思いがある一方で現実と向き合う】	<嚥下障害があるため食べることが命にかかわるとわかっている>
	【経口から飲水することで満足感を得る】	<ジュースを飲むことで満足感を得ており、できる限り続けたい>
食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画を視聴する思い	【食へのこだわりから視聴に至る】	<気管切開し、食事摂取が困難になってから視聴し始めた>
		<偶然視聴した咀嚼音による ASMR 動画に興味をひかれた>
		<胃瘻造設前から好んで映像を視聴>
		<昔食べていたものを動画サイトで検索し料理を作る映像を視聴する>
	【聴覚と視覚から得る満足感】	<料理シーンや食事摂取映像を視聴して自分が料理を作る想像をすることが楽しい>
		<咀嚼音の音が好きで咀嚼音をきくことで食べている感覚を得る> <映像で満たされる食欲>
【映像の楽しさから視聴に至る】	<楽しいという気持ちから料理を作る映像を視聴する>	
【食事摂取映像視聴により食欲が緩和される】	<食事摂取映像を視聴することで気持ちが紛れ、食欲が緩和される> <映像視聴することで食に対する気持ちが緩和される>	
【コミュニケーションツールとして映像を活用する】	<他者とコミュニケーションを図るために視聴している>	

クス効果よりも高度な認知レベルで複雑性を増し、うずくような感覚を呈する。」¹⁾と述べているように、ASMR 動画にはリラクセス効果も期待できると考える。また、食事摂取映像はコミュニケーションの一環であり、対象者の楽しみとして活用されていた。食事摂取映像から得た情報をスタッフと共有することが気分転換になっており、その結果食欲が紛れていることがわかった。大塚は、「死ぬまでの限られた時間のなか、終末期の患者が自分に必要だと考えるものを自分で選び、食べることは、生きていることを実感し、生きている自分を支えることになる。」²⁾と述べている。3名にとって食事摂取映像や咀嚼音による ASMR 動画の視聴は、自分で見出した、食欲を満たすための手段の一つであり、生きている自分を支えるために必要なツールであると考えられる。

胃瘻造設を行い、経口摂取が困難となる体験はストレスを伴うものである。看護師は胃瘻造設決定時には、患者の不安に寄り添い、患者の食べたいという思いを尊重しながら胃瘻造設後も経口摂取ができる方法がないか医師と模索することも必要であると考えられる。経口摂取が困難となっても食べたいという思いが続いていることを理解し、食欲を満たすことができる方法を患者とともに考えることも重要と言える。

引用文献

- 1) 櫻井典子, 大野健, 児玉直樹:fMRI による ASMR 視聴で誘発されるリラクセス状態の脳機能解明, 新潟医療福祉学会誌, 20(1), 121, 2020.
- 2) 大塚有希子, 尾岸恵三子:終末期の患者が食べることの意味, 日本看護研究学会雑誌, 34(4), 118, 2011.